

研究ノート

漢口の旧日本租界地の建築について

内 田 青 蔵

UCHIDA Seizo

非文字資料研究センター長 神奈川大学工学部建築学科教授

1 はじめに

『非文字資料研究センター News Letter』No. 36 (2016年9月)で、既に漢口の旧日本租界地の建築に関する概要を報告した⁽¹⁾。本報告は、内容的に重なる部分もあるが、今回行った九江・沙市・漢口の3か所の旧日本租界地調査から、建築遺構の最も多く存在する漢口の旧日本租界の建築について改めて報告するものである。

今回訪ねた九江・沙市・漢口の旧日本租界地に関しては、租界班としても九江と沙市は初めての調査であったが、漢口に関しては租界班のメンバーである大里浩秋・孫安石・富井正憲が調査を行い、2006年に既にその成果報告を行っている⁽²⁾。その中でも筆者が専門とする建築分野に関しては、富井が2005年に行った旧日本租界地内の建築の悉皆調査の結果を「漢口日本租界の都市空間史」として報告している。その成果は、12棟の建築が現存していることを明らかにできたことであった。そのため、今回の漢口での調査は、漢口の旧日本租界地の現状確認と、富井の明らかにした12棟の再確認を目的としたものであった。本稿は、その詳細報告である。

なお、再確認という目的であったため、調査期間は極めて短い1日だけだった。しかしながら、近代建築史を専門とする筆者にとっては、初めて訪れた旧イギリス租界地などの建築遺構も魅力的で、旧イギリス租界地を中心に建築遺構の視察も急いで行った。調査前に予め写真集等から漢口のおおよそのイメージを掴んでいたものの、旧イギリス租界から始まる各旧租界地のバンドに連なる建築群の景観はまことに見事で、個々の建築の質はともかくも、上海のバンドの景観に

も負けない連続性と壮大さを感じさせるものだった。残念ながらそのバンドの魅力を十分に堪能する時間はなかったが、それでもこの旧イギリス租界地から始まる連続した建築群の景観が旧日本租界地付近で途切れていることからだけでも、今日の漢口における旧日本租界地の歴史的資産としての価値が理解できるように感じられた(図1)。



図1 武漢税関(旧江漢関)(撮影内田)。ここからバンドの建築群が始まる

2 漢口の旧日本租界地の開設経緯

調査報告にあたって、最初に漢口の旧日本租界地が開設される経緯に触れておきたい。イギリス・フランスと清国の間で始まったアロー戦争の終結を目指し、1858年に、清国とロシア・アメリカ・イギリス・フランスとの間で「天津条約」が結ばれた。その中で、キリスト教の信仰と布教の自由化などとともに、廣州・天津・領江・漢口・九江そして厦門の6都市に租界の開設が定められた。1861年になるとイギリスは漢口に租界地を開くために「英国漢口租地原約」を結び、護岸工事はもとより、バンドの設置とともにグリッドプランによる土地整理事業を進め、漢口に旧イギ

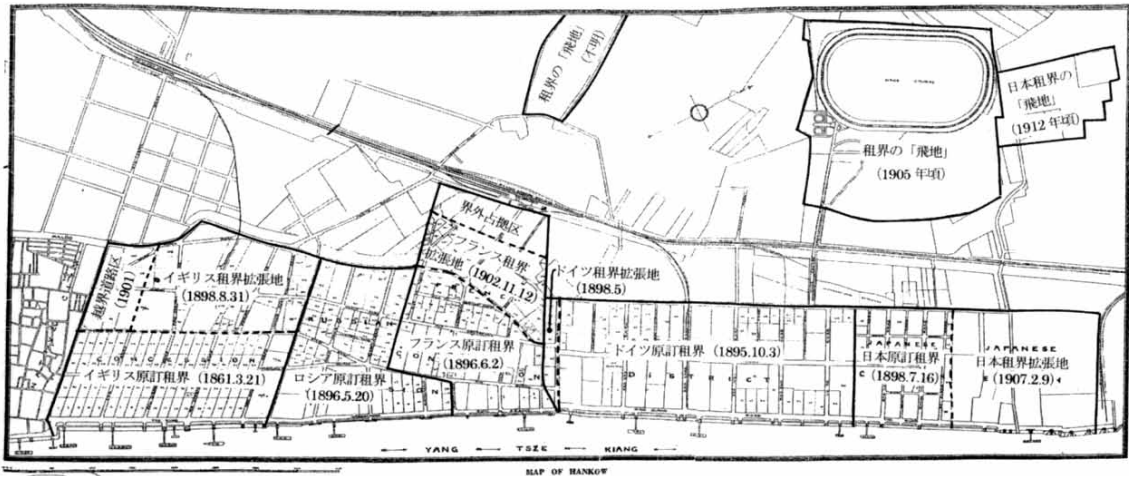


図2 漢口租界拡張模式図(李江「漢口租界の都市と建築」『中国における日本租界 重慶・漢口・杭州・上海』所収(大里浩秋・孫安石編著、御茶の水書房、2006年)より転載)

リス租界地を開設した。一方、日本が漢口に租界地を設立したのは、1895年の日清戦争の勝利を契機にしたものであった。すなわち、日清戦争で清朝が敗戦すると、1895年にドイツ、1896年にはロシアとフランスが次々と租界地を開設した。そして、1898年には日本も清国と「漢口日本居留地取極書」を取り交わし、旧イギリス租界地の北側に設けられていた旧ドイツ租界地の北隣に旧日本租界地を獲得した(図2)。

1907年、新たに日本政府は租界地の拡張の交渉を行い、既存の租界地の北側に拡張地が認められた。ただ、拡張した旧日本租界地は、面積はロシアやフランスの租界地よりも広がったが、その位置は他国と比べると取得時期が遅かったこともあって中心市街地から最も離れた揚子江下流の立地条件の悪い場所であった。そのため、日本政府は、租界地整備として護岸工事や低地の埋め立て工事などの土地整理事業を行う必要があった。こうした問題を抱える土地であったため、「漢口日本居留地取極書」では、道路、港湾の建設、租界内の治安を維持する警察権なども日本領事に属することが盛り込まれていた。⁽³⁾

孫安石によれば、旧日本租界地は、「漢口の城壁の外に置かれた沼地」であり、浸水被害が頻繁に起こる場所であったという。そのため、旧日本租界地のうち、旧ドイツ租界地に隣接する当初の租界地部分の整備は大倉土木組が行い、1909年に終了した。また、1907年に新たに入手した拡張地部分の道路工事や下水工事整備は、その後しばらく経った1920年に旧天

津日本租界地の工事を担当した実績のある東京建物株式会社が行った。⁽⁴⁾こうした整備事業に前後して旧日本租界地の土地の売却が行われ、後述するように1910年12月、租界2番地に漢口日本総領事館が竣工し、旧フランス租界に設けられていた領事館の移転も行われた。旧日本租界地の様々な建築の建設が始まったのである。

3 漢口の日本租界地再見

土地整備が終わった1909年以降の日本租界地の発展の様子は、孫安石が紹介している漢口の日本居留民数を見てみるとよく分かる。⁽⁵⁾すなわち、1909年には日本居留民数は1136名であったが、1917年には2045名と倍増しており、租界地が急速に発展していた様子が窺える。しかしながら、1920年代になると漢口は様々な兵乱や戦闘に巻き込まれ、また、中国ナショナリズムの高揚もあって、日本租界の経済活動の発展は停滞した。そして、1930年代になると、1931年の大きな被害を与えた長江の大洪水や満州事変などもあって、日本居留民数は1936年には1858名に減少していた。そして、1937年に日中戦争が始まると、日本居留民は撤退し始め、居住者の居なくなった旧日本租界地には中国人が入り込み、中国人による建物の接収や破壊などが行われ、大きな被害を受けた。ただ、1938年6月になると日本軍が漢口を爆撃するなど戦争が激化する中で、同年10月には日本軍が武漢三鎮を占領

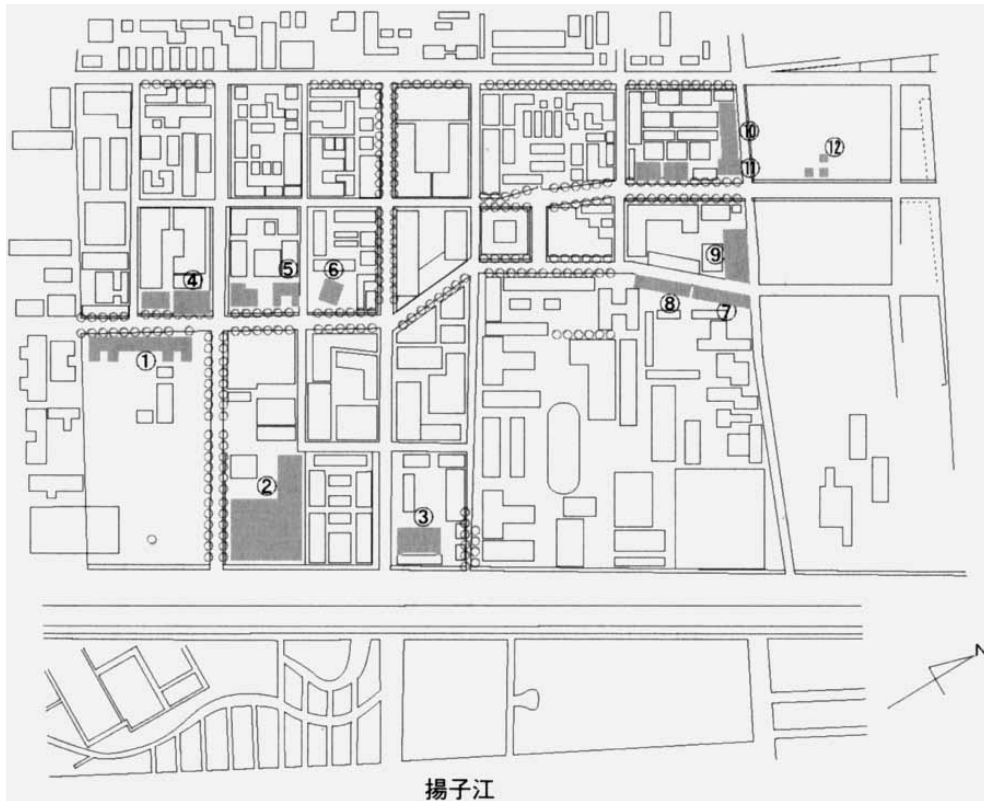


図3 2005年建築物現況概略配置図（富井正憲『漢口日本租界の都市空間史』『中国における日本租界 重慶・漢口・杭州・上海』所収（大里浩秋・孫安石編著、御茶の水書房、2006年）より転載）

し、日本租界の再開を宣言した。これにより再び日本居留民が租界地に戻った。このように漢口の旧日本租界地は、建築の建設と破壊が繰り返されていたのである。

さて、漢口の旧日本租界地が最も発展した当時の様子を示していると考えられるのが、1930年の「日本租界全図：PLAN OF JAPANESE CONCESSION HANKOW」⁽⁶⁾である。富井正憲は、この地図を手掛かりに2005年、現地の建物の悉皆調査を行い、12棟の建物が現存していることを明らかにしたのである（図3）。

今回の調査は、富井が作成した「2005年建築物現況概略配置図」に示されている12棟の確認を行った。その結果、2005年当時特定された12棟は、今回の2016年の追跡調査においても全て現存することが確認できた。

改めて今回の調査結果を述べれば、今回の再確認によってそれぞれの建物の状況とともに、建物を取り巻く周辺環境が大きく変貌していることが確認できた。すなわち、富井が作成した「2005年建築物現況概略配置図」を見ると、地図が暗示しているように、現存する12棟は旧日本租界地の敷地の南寄り地区に集中し、1907年に拡張された地区の中央を縦断している

旧大正街の北側地区には1棟が確認されていただけであった。このことから窺えるように、この旧大正街以北は、歴史的建築遺産がほとんど存在しない地区と考えられ、そのため、武漢市政府の都市計画の中で再開発エリアと特定され、武漢新天地として新たなショッピングモールに生まれ変わっていたのである。ただ、この地区で富井が見出した⑫の民団小学校住宅は、当時、廃屋状態で、その存在が危ぶまれていた建物であったが、現在は、改修されブティックの店舗として再利用されている（図4）。いわば、積極的な再利用がなされているのである。また、旧大正街を挟んで



図4 旧民団小学校住宅（撮影内田）



図5 旧日華製油社宅（現「漢口新四軍軍部旧跡記念館」）
（撮影内田）

武漢新天地の反対側に位置する⑦の日華製油社宅は、調査当ても「湖北省文物保护单位漢口四軍軍部旧跡」に指定されていたが、今回の調査時では改修され、「漢口新四軍軍部旧跡記念館」の名称で公開されていた（図5）。このように建物は現存しつつも、その利用の仕方や周辺環境に大きな変化が見られたのである。

なお、この武漢新天地の計画にかかわった南京大学の李百浩教授によれば、この地区の再開発にあたっては、当初スクラップアンドビルドで考えられていたという。しかしながら、開発のための調査を行ったところ歴史的建造物が確認され、開発設計コンクールにおいても歴史的建築を再利用する提案が多く見られたため、実施にあたっては歴史的建築を保存し、それらの歴史性や風格を残す計画に変更されたという⁽⁷⁾。そして、実際の工事では、戦後の建物も加え、重要と考えられていた10棟のうち、痛みの激しい2棟を解体

し、他は傷みに応じて部分的な保存や全体を残した再利用がなされ、また、保存された3棟が2014年度の武漢優秀歴史建築に指定されたという⁽⁸⁾。既に触れた⑫の旧民団小学校住宅は、こうした計画方針に沿って再利用されたことが分かる。

いずれにせよ、再開発計画まで詳細な建築遺構調査が実施されなかったため、歴史的建築の存在が知られていなかったが、実際には武漢新天地の開発当時の日本租界地北端地区には戦前期の住宅建物が多数存在していたのであった。では、中国側の調査で明らかとなった歴史的建築はどのようなものであったのであろうか。そこで、改めて李百浩教授と松本康孝教授のお二人にご教授いただいた⁽⁹⁾。それによれば、歴史的建築として重要と考えられていた10棟とは以下のものであった（図6）。

- ① 建設当初不詳、現存せず
- ② 建設当初不詳、竣工1934年、李石樵公館（辛亥革命からの革命兵士として軍職についていた人物の住まいとして知られる）、武漢優秀歴史建築（図7）
- ③ 建設当初不詳、竣工年不詳、夏斗寅漢口公館（清末からの軍人で革命に加わり、1932年には湖北省政府主席を務めた人物の住まいとして知られる）、武漢優秀歴史建築（図8）。ただし、部分的に古材を使用しつつも、全体は鉄筋コンクリートで再建されている

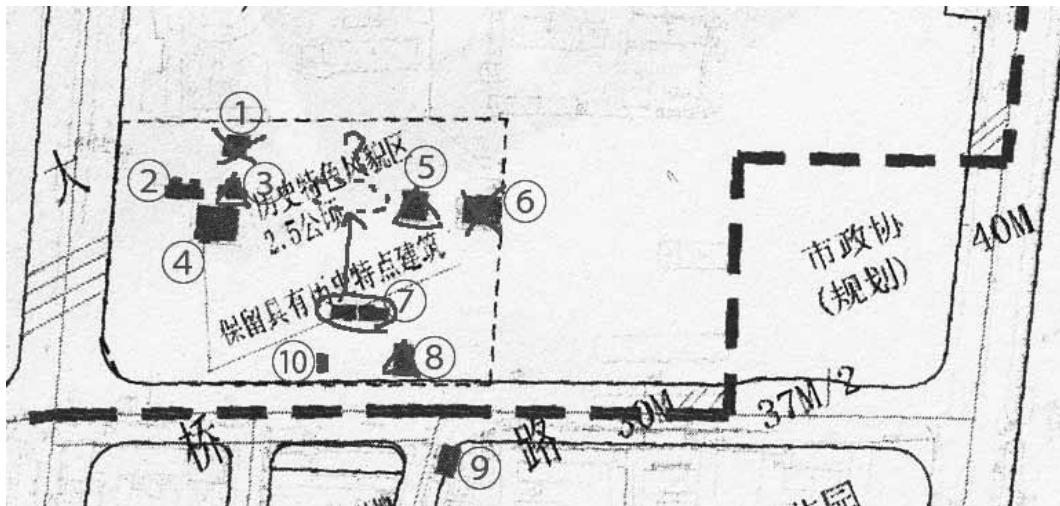


図6 李百浩教授提供の旧日本租界地の歴史建築に関する配置についての資料



図7 旧李石樵公館（撮影李百浩教授）



図9 1930年代の旧日本人居留民住宅（撮影内田）



図8 旧夏斗寅漢口公館の優秀歴史建築選定のプレート（撮影李百浩教授）



図10 1953年の旧長江水利規画事務所永清片宿舍区正門（撮影内田）

- ④ 旧民団小学校住宅（日本人の会社事務所という説もある）、竣工年不詳、1930-1940年の間は日本人居留民のための小学校教師の住宅だった、武漢優秀歴史建築（図4）
- ⑤ 旧日本人居留民住宅、竣工1930年代、1949年以後長江水利規画事務所職員宿舍
- ⑥ 旧日本人居留民住宅、竣工1930年代、1955年以後中原電子工場職員宿舍、現存せず
- ⑦ 旧日本軍人宿舍、竣工1930年代、1953年以後長江水利規画事務所職員宿舍、移築
- ⑧ 旧日本人居留民住宅、竣工1930年代、1950年代以後長江水利規画事務所職員宿舍（図9）
- ⑨ 旧日華製油会社社宅、竣工1910-1920年代、1937年以降新四軍武漢軍部、現在漢口新四軍軍部旧跡記念館（図5）
- ⑩ 旧長江水利規画事務所永清片宿舍区正門、竣工1953年（図10）

この10棟のうち、①と⑥が取り壊され、⑦が敷地内で移築、③と⑤と⑧が部分保存、②と④、⑨、⑩が

ほぼ全体を残して再利用されていることが分かる。そして、②と③と④が武漢優秀歴史建築に指定されたのである。このことから、各建物の創建時の建物名称や竣工年などの詳細は明らかにはされていないものの、戦後建築である⑩と、部分的な保存、および、建物の現状が不明の⑦を除いた②と④と⑨、これに優秀歴史建築に指定された③を加えた4棟は、戦前期の旧日本租界に現存する建築であったと思われる。ちなみに、④と⑨の2棟は既に富井が現存を確認しているものであるため、新たな追加としては、②の1934年の2連戸建て住宅と③の竣工年は不明ながら3階建ての住宅が新たな追加建築ということになる。ともあれ、この新たに開発された武漢新天地は、歴史的建築の歴史性や風格を継承することを意識した計画で、旧日本租界地に建てられた日本人居留民の住宅の建築遺構を中心としたものであった。それは、言い換えれば、この武漢新天地は、旧イギリス租界地などのように戦前期の建物保存による直接的継承とは異なり、旧日本租界地に現存する戦前期の建築の歴史性や風格をデザインとして取り入れた一種のイメージ保存による継承が行われ



図11 旧大石洋行（「現八路軍武漢弁事処旧址紀念館」）（撮影内田）

た場所とも解釈できるのである。

ところで、今回の確認調査では、もう一棟、戦前期の遺構が確認できた。旧中街と旧大正街の交差部に位置する鉄筋コンクリート構造の4階建ての建物で、現在は「八路軍武漢弁事処旧址紀念館」として再利用されている（図11）。聞き取りによれば、戦前期は、この建物は日本商社である旧大石洋行であったという。ちなみに、この大石洋行は雑貨を扱い、1905年に漢口で開業した日本商店の一つであった⁽¹⁰⁾。建築年代は不明だが、1937年の日中戦争前の旧日本租界地の様子を描いた地図にも、同じ場所に「大石洋行」の名称が確認でき、1937年以前から営業を行っていたことが窺える（図12）。

なお、1937年の日中戦争の開始期から翌年の1938年10月の日本軍の漢口支配までの旧日本租界地の空白期に、租界地の建物は爆破や放火などの多くの被害を受けている。1938年10月28日に漢口の花輪総領事が外務大臣近衛文麿に宛てた「漢口ニ於ケル邦人權益被害状況ニ関スル件」⁽¹¹⁾によれば、その被害状況は以下のように記されている。なお、「日界」は「日本租界」を意味するものと思われる。

1：完全ニ粉碎セルモノ

（爆破ニ因ルモノト認メラル。）

- ①漢口日本総領事館及総領事官邸 日界 河街
但シ演武場及構内書記生宿舍一棟三戸分ハ多少
修理ヲ必要スル程度
- ②横浜正金銀行漢口支店長舎宅 日界 山崎街
- ③大石洋行（二、三、四階ハ従来警察官舎）
同 中街

2：全焼セルモノ（放火ニ依ルモノト認メラル。）

- ①漢口神社 日界 中街
- ②漢口海軍陸戦隊本部 同 河街
- ③漢口日本居留民団事務所 同 山崎街
- ④漢口日本小学校（幼稚園ヲ含ム） 同 同
- ⑤漢口日本人倶楽部 同 同
- ⑥三菱公司漢口支店舎宅 同 河街
- ⑦日華製油株式会社舎宅並ニ工場 同 大正街
但シ河街ニ面セル倉庫ハ無事
- ⑧漢口同仁会医院 同 山崎街
但シ裏側病舎一棟無事
- ⑨漢口銀行 同 成忠街
- ⑩日界変電所 同 平和街
- ⑪福田旅館 同 中小路
- ⑫玉円公司（雑貨貿易商） 同 同
- ⑬四季園（花屋） 同 同
- ⑭料亭 妻鶴 同 中街
- ⑮料亭 福宮 同 北小路
- ⑯料亭 喜楽 同 同
- ⑰舞踏場「クレーン」 同 新小路
- ⑱山崎街西側台銀支店長舎宅ヨリ中街角ヲ左折第一
特区境界ニ至ル迄ノ一角約二十余戸
（殆ト全部邦人宿舍）
- ⑲中街富貴館及付近約十戸
- ⑳其他約三十戸ニシテ租界建物ノ主要ナルモノハ
全焼シ辛シテ焼失ヲ免カレタルモノモ屋内ニ一
物ヲモ留メス其惨状真ニ言語ニ絶スルモノアリ

これによれば、1937年から1938年の日本居留民が引き揚げた空白期に、旧日本租界地の建物は破壊や放火の被害はもちろんのこと、建物は残っていても内部の生活用品などはほとんど略奪され、何もない廃墟のような状況であったことが想起されるのである。そして、その破壊された建築に、今回確認した旧大石洋行が含まれていることが分かる。そのため、現存する建物は、その後の再建されたものであることは確かであり、その建設時期は1938-1943年の間であることが推測できる。また、現存建物として富井ガリストアップした旧総領事館と旧海軍陸戦隊は1938年にそれぞれ破壊と全焼したことが記されており、これらの建物も

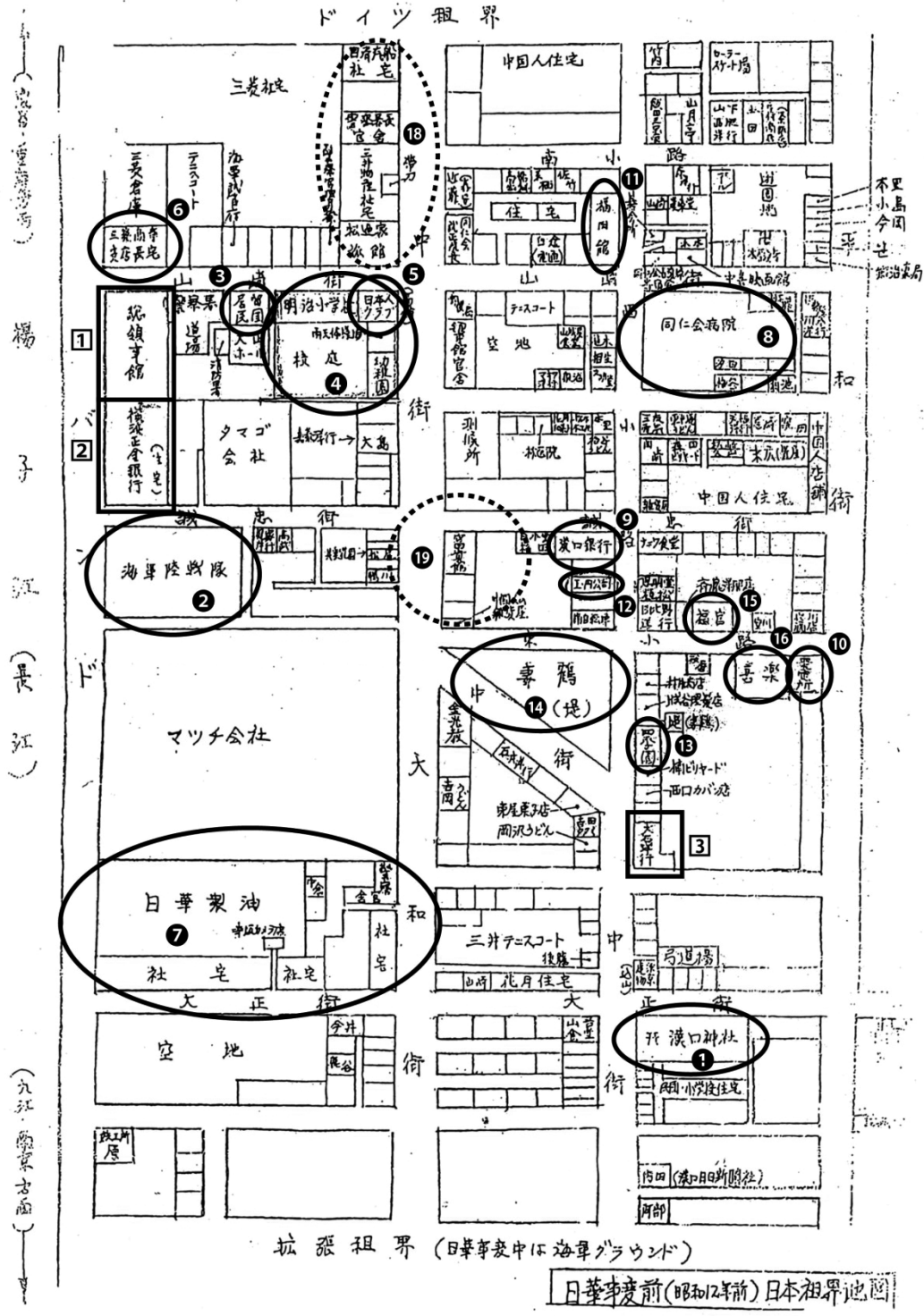


図12 菊池洋作成「日華事変前(昭和12年前)日本租界地図」に花輪総領事が外務大臣に報告した被害状況を記入している。1-3は「1:完全ニ粉碎セルモノ」(爆破によるもの)で、□でその位置を示している。同様に1-16は「2:全焼セルモノ」(放火によるもの)で、○でその位置を示している。なお、17-20はその位置を特定できなかったが、15と19は推定される位置を示している。

旧大石洋行同様に1938-1943年の間に再建された建物の可能性が考えられるのである。なお、この破壊ならびに焼失した建物を図12の地図上に表示すると花輪総領事が報告しているように、漢口の旧日本租界地が大きな被害を受けていたことが分かる一方、軍事力で支配していたわずかな期間でも総領事館をはじめ多くの建築を再建していたことが分かる(図12)。

いずれにせよ、2006年に明らかとなった12棟は、2016年3月でもこれらの存在が確認できた。そして、今回の調査で新たに1934年竣工の住宅で旧李石樵公館として知られる建物、竣工年は不明ながら旧夏斗寅漢口公館として知られる建物、および旧大石洋行の3棟も旧日本租界地時代の遺構と考えられることが明らかとなった。

4 漢口の旧日本総領事館建築について

4-1 明治期の漢口の日本総領事館建築について

ところで、今回の漢口の旧日本租界地の建築遺構調査で、筆者が強い興味を抱いたのが旧日本総領事館である。総領事館は、当然ながら日本という国家の象徴であり、威厳性と品格を保ちながら経済的にもデザイン的にも質の高い建築が建設されていたことが想起される。その意味で、大改造を経ているとはいいながらも、他国の旧総領事館がホテルとして一般の人々向けに再利用されながら現存していることは極めて異例といえるし、歴史的建造物の再利用の事例としても注目すべきものと考えられるからである(図13)。

漢口の旧日本総領事館の歴史を振り返れば、最初の領事館は旧フランス租界に設けられていたが、日本租界地の整備とともに行われた領事館建築の工事が終わった1910年には、旧日本租界地に移転された。その際、日本政府は、蘇州・杭州・南京の日本領事館を廃止し、代わって漢口の領事館を上海と廈門と同様に総領事館に昇格させている。そのため、漢口の総領事館は、建築としても諸外国と比較しても遜色のない高い質が求められたと考えられるのである。現存する旧日本総領事館建築は、領事館建築としては3代目のものとなる。すなわち、旧フランス租界のものを初代の領事館建築とすれば、旧日本租界地内に1910年竣工

し、1938年の破壊まで存在していたものが2代目であり、その後の1938年以降に建てられた3代目の総領事館建築が現存するものといえるのである。

さて、破壊された2代目の総領事館は、1912年3月号の日本建築学会機関誌『建築雑誌』に「漢口大日本帝国総領事公館新築概要」「漢口大日本帝国総領事館事務所新築概要」⁽¹²⁾として詳しく紹介されている。これによれば、公館と事務所はともに起工は1909(明治42)年9月、竣工は1910(明治43)年12月で、公館は、基本は煉瓦造の3階建て、事務所も基本は煉瓦造の2階建てである(図14)。公館は、長江に平行に走るバンド側の江沿道路(河街)に正面を置き、事務所は、その道路に直行して配された旧山崎街に正面が向くように配された(図15)。公館は、1階が玄関部や娯楽室、球技室とともに厨房・使用人室などのサービス空間、2階は食堂、書斎、客室、客寝室など主に執務室と接客用空間、3階は居間、書斎、寝室、化



図13 旧日本漢口総領事館(撮影内田)

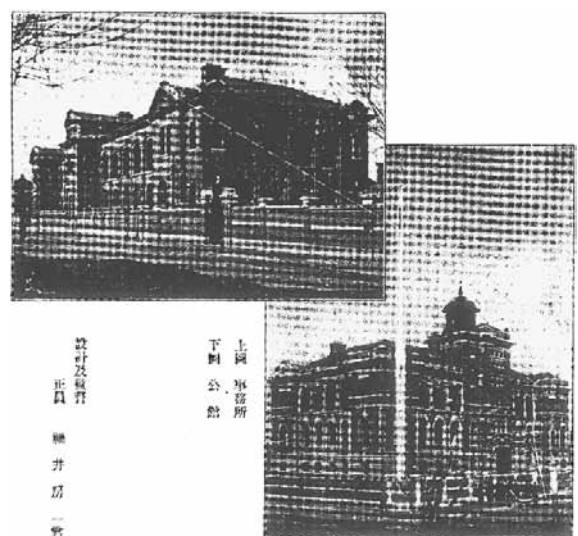


図14 1910年竣工の日本総領事館公館および事務所棟外観写真(『建築雑誌』より)

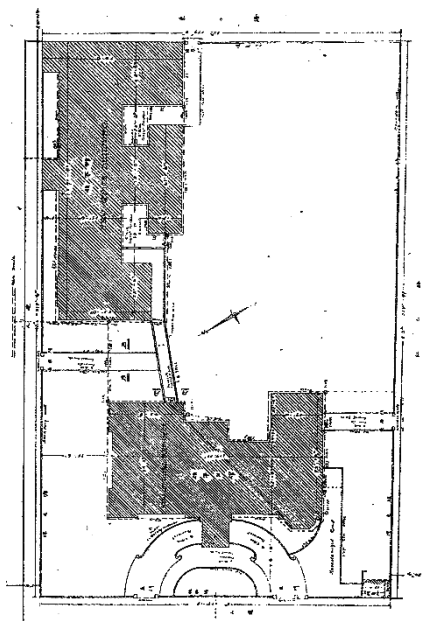


図15 1910年竣工の日本総領事館公館および事務棟配置図（『建築雑誌』より）

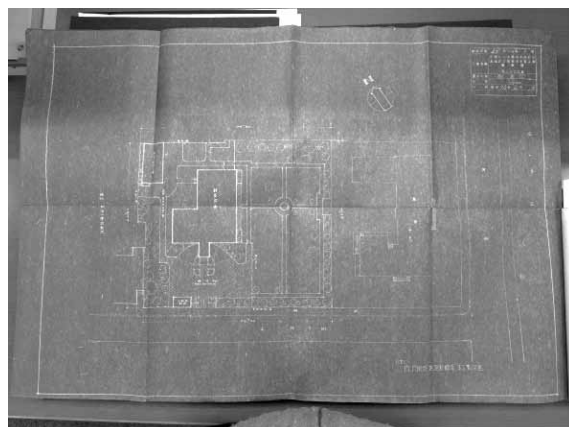


図17 日本総領事館館長官舎および日本総領事館庁舎配置図

めているのは、既に触れたように日中間の租界地の取り扱いを記した「漢口日本居留地取極書」で租界内の治安を維持する警察権が日本領事に属することが定められていたためである。

建物の外観は、赤レンガに白い石のアクセントを交えたグラフィカルなデザインを特徴とする「辰野式」と称された様式を基調としたものであった。この辰野式とは、日本人建築家第一号として知られる辰野金吾が帝国大学工科大学の教授を退任した1902年以降、好んで用いたことでも知られるフリー・クラシック様式ともクイーン・アン様式とも呼ばれる様式で、当時の日本建築界で流行していたモダンで新しい建築様式の一つであった⁽¹³⁾。設計は、福井房一（1869-1937）で、施工は大倉土木組が請け負った。この施工を担当した大倉土木組は、1898年に定められた日本の原訂租界地の土地整理事業を担当しており、そうした経験もあって施工を担当したものと思われる⁽¹⁴⁾。また、設計者の福井は、工手学校（現工学院大学）卒業後、アメリカのニューヨークの建築事務所で働く傍ら、クーパーユニオン・カレッジの建築学科を卒業した建築家であった。帰国後は一時期海軍技師として奉職し、その後1907年に漢口で福井工務所を開設し、1911年秋までに、漢口総領事館をはじめ、漢口日本人倶楽部、横浜正金銀行漢口支店、日清汽船漢口支店など建築家として多くの仕事を残した。漢口総領事館は、漢口における福井の代表作品の一つでもあった。なお、福井は、学歴から見ればアメリカの大学で学ぶなど、当時の最も新しい建築教育を受けた建築家といえるが、中国でその存在は知られつつも、国内ではほとんどその

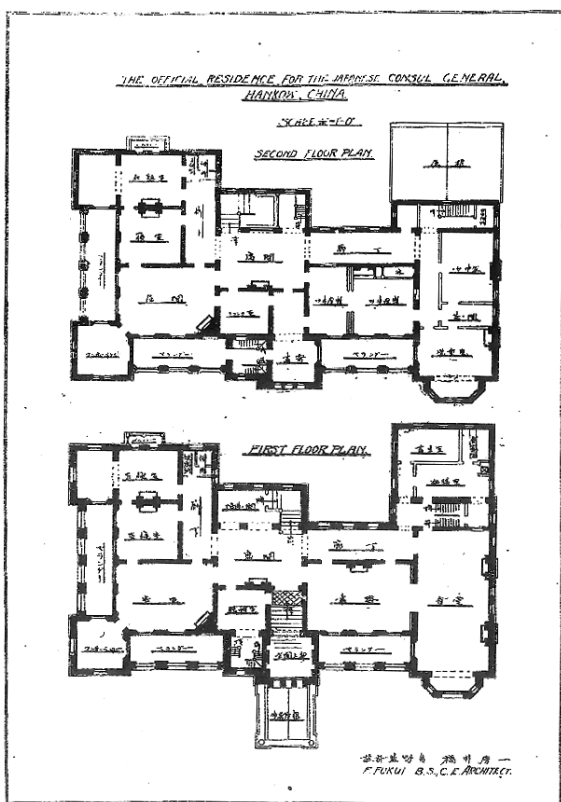


図16 1910年竣工の日本総領事館公館平面図（『建築雑誌』より）

柱室、児童室、日本座敷など総領事家族の生活空間であった（図16）。一方、事務所は、領事館関係と警察局関係という二つの機能の場からなり、領事館関係は1階が領事館事務所、2階が事務官宿舎、警察局関係は1階が警察局事務所と刑務所、2階が警察官宿舎であった（図17）。総領事館事務所の一部を警察局が占

存在は知られていない。今後は、こうした海外で活躍した建築家を、日本国内の状況の中だけで解釈されている建築史研究の中で、どう位置付けていくかは重要な課題といえるであろう。⁽¹⁵⁾

4-2 現在の旧日本総領事館建築について

現存する漢口の旧日本総領事館に関しては、これまでの既往研究がなく不明な点が多い。⁽¹⁶⁾

現状から見ると、旧日本総領事館は、江沿道路（河街）と直交する山崎街の二つの道路に沿ったL字型の形状で、江沿道路側に正面、山崎街側に警察局長の正面がそれぞれ配されていたと考えられる。また、現存する建物は4階建てであるが、目視から判断すれば、当初は3階建てで、4階部分は増築と考えられる。ただ、内部に関しては、目視では判断できない。また、現状では旧日本総領事館の建物は1棟しか現存しないが、創建時はどのようなものであったか明らかではない。

詳細な検討は、次に譲りたいが、収集した外務省外交史料館所蔵図面などを概観すれば、漢口の旧日本総

領事館館長官舎と旧日本総領事館庁舎に関する図面は1939年に作成されており、旧日本総領事館館長官舎は旧日本総領事館庁舎よりも先んじて1940年には竣工していたと考えられる。図面を見る限り、再建計画は、破壊された旧日本総領事館と旧日本総領事館事務所の建てられていた同じ敷地で行われ、旧公館のあった場所に新たにコの字型をした鉄筋コンクリート構造による3階建ての総領事館庁舎、その背後に庭を挟んで山崎街に門を構えた2階建ての鉄筋コンクリート構造による館長官舎が計画されている（図18、19）。また、1940年には日本総領事館員官舎の図面も作成されている。ただ、この図面で確認される計画が実施されたのかどうかは、现阶段では判断できない。今後は、旧日本租界地を象徴する建築として、これらの資料を詳細に検討し、2代目の日本総領事館事務所ならびに日本総領事館公館との関係性、あるいは日本の領事館建築の特徴などの一端を明らかにするとともに、旧日本租界地の景観上の意味などを検討したいと考えている。

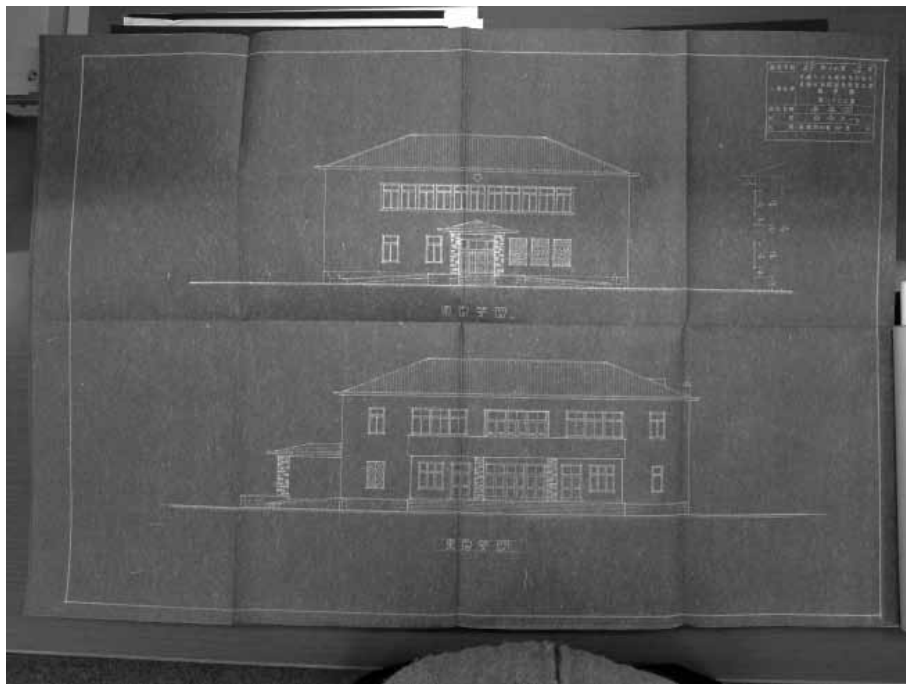


図18 旧日本総領事館館長官舎立面図

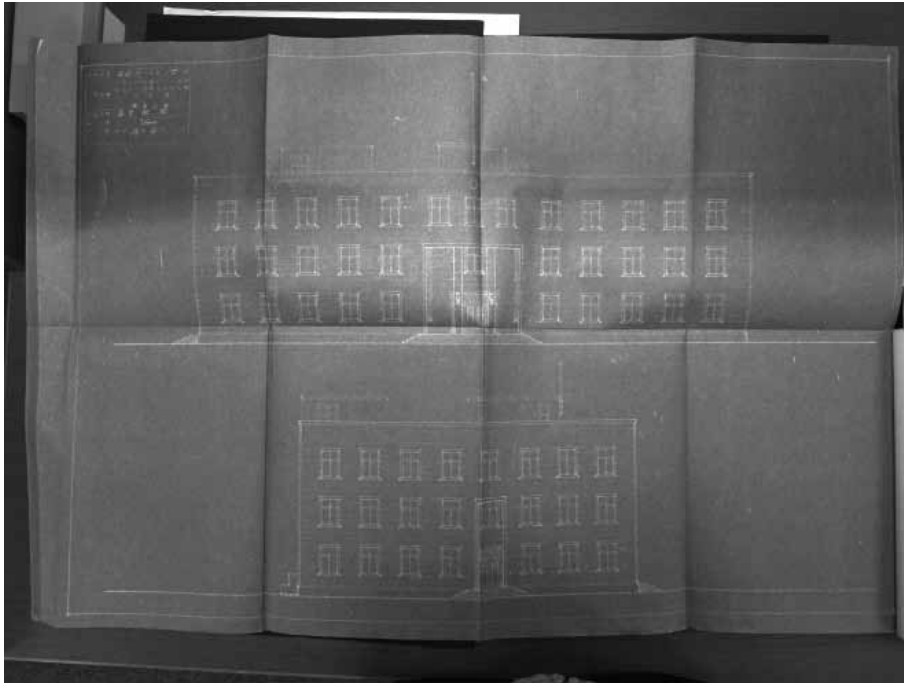


図 19 旧日本総領事館庁舎立面図

注

- (1) 拙稿「漢口の建築について」『非文字資料研究センター News Letter』No. 36 所収 pp. 17-20。
- (2) 大里浩秋・孫安石編著『中国における日本租界 重慶・漢口・杭州・上海』（神奈川大学人文学研究叢書 22）御茶の水書房、2006 年。本書に漢口に関するものとして孫安石「漢口の都市発展と日本租界」、富井正憲「漢口日本租界の都市空間史」、李江「漢口租界の都市と建築」が収録されている。
- (3) 注 2 参照。
- (4) 李江「漢口租界の都市と建築」。注 2 参照。
- (5) 注 2 参照。
- (6) 注 2 参照。なお、漢口租界志編纂委員会編『漢口租界志』（武漢出版社、2003 年）には、「1938 年漢口特四区（原日租界）全図」が掲載されている。地図本体には「漢口日本租界全図 民国十九年十一月 漢口市政府工務局□（掌？）」と記されており、これから製作年は 1930 年であることがわかる。なぜ 1938 年のものと記されているのかは不明だが、地図の内容は同じものである。
- (7) 李百浩、李彩「武漢における旧日本租界の建築再生」『中国・朝鮮における租界の歴史と建築遺産』所収（大里浩秋・貴志俊彦・孫安石編著、御茶の水書房、2010 年）。
- (8) 李百浩、松本康隆、李朝「スクラップアンドビルドを超えて」『アジアのまち再生』所収（山家京子・重村力・内田青蔵・曾我部昌史・中井邦夫・鄭一止編著、鹿島出版会、2017 年）。
- (9) 李百浩および松本康隆の両氏には、いろいろご教授

いただき、また、写真も提供していただいた。ここに記して感謝したい。

- (10) 注 2 の孫安石「漢口の都市発展と日本租界」参照。
- (11) 外務省外交史料館所蔵外務省記録。レファレンスコード B05016160100
- (12) 『建築雑誌』第 303 号、1912 年 3 月、pp. 142-145 および図版。
- (13) 藤森照信は、「フリー・クラシック」と称している（藤森照信『日本の建築 明治大正昭和 3 国家のデザイン』p. 112、三省堂、1979 年）。
- (14) 注 4 参照。
- (15) 田中重光は、領事館建築を研究対象とした自書『大日本帝国の領事館建築——中国・満州 24 の領事館と建築家』（相模書房、2007 年）の中で、建築家第一世代を「近代建築の黎明期」とし、「第二世代の真水英夫や三橋四郎、野村一郎、平野勇造、福井房一等は、海外で創作活動を始めた日本近代の過渡期にあたる世代であるとともに、海外編の第一波に位置付けることができる」と述べている。
- (16) 『大日本帝国の領事館建築——中国・満州 24 の領事館と建築家』（田中重光、相模書房、2007 年）は、領事館建築を対象に論じたものであるが、残念ながら現存する漢口の旧日本総領事館に関しては触れられていない。